

2020 年度入学式 学長式辞

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。今回の入学式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止せざるを得ず、メッセージだけをこのような形でお伝えすることになってしまいました。

今回のような感染症が人間の脅威となるようになったのは、農業や牧畜によって人が定住し過密な集落が生まれたからだと言われています。人類は地球上で文明を発達させ、都市に多くの人々が住み、都市間の移動手段も飛躍的に発達させてきました。皮肉にもそれが感染症の拡大を加速させる形になってしまったのです。ウィルスをはじめとする微生物は 40 億年前から地球上で生き続け進化してきました。その進化は、人類が環境や医療の整備により感染症の対抗手段を発達させたのに抗うかのように、新しく人に宿るウィルスに変異させてきたのです。どんなに文明を発達させても、人も自然界の一動物に過ぎず、自然の脅威にはなす術もないことを思い知らされたのです。

自然との共存は容易なことではありません。昨年 12 月衝撃的な事件が私たちに悲しみをもたらしました。アフガンで献身的に活動されておられた医師の中村哲さんが銃弾に倒れたのです。中村医師は、アフガンで診療所を展開されておられましたが、大干ばつによる乾きと飢えの現状を目の当たりにし、土木の勉強を一からはじめ用水路の建設に邁進されたのです。帰らぬ人となった中村医師にアフガンの人だけではなく日本でも大きな悲しみに包まれました。

中村医師は、著書の中でこう語っています。「人も自然の一部である。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳

然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう」。中村医師は、武力にも、自然にも対峙し、アフガンのために走り続けた人でした。

その中村医師は、幼少期を北九州市の若松で過ごされていたのです。本学の国際環境工学部、ひびきのキャンパスのある若松です。若松での幼少期に祖母から教えられたことが中村医師の倫理観の礎になったと、自身で回想されています。弱者は率先してかばうべきこと、職業に貴賤はないこと、どんな小さな生き物の命も尊ぶべきことなどです。

今、皆さんは、中村医師が幼少期を過ごした同じ北九州の地で新しい学びを始められるのです。勉学は知識やスキルを身につけることですが、その成果が行動となって現れなければ意味がありません。言葉でどんなに格好いいことを表しても、それは口先だけの誤魔化しにすぎないこともあります。中村医師のように語らずとも行動で示すことが何十倍にも説得力があるのです。

行動を起こすことには、最初誰でも臆病であるかもしれません。大干ばつと格闘し続け、走り続けた中村医師の姿に畏敬の念を抱くのは私だけではないはずです。行動し続けることに無駄なことはありません。走り続けていくと、そこには辿ってきた軌跡が広がっていきます。

今皆さんはその軌跡を描くスタートラインに立っています。どんな軌跡を描いていくのかは皆さん次第です。その途上では、息が切れて立ち止まってしまうこともあるでしょう。足がもつれてしまうこともあるかもしれません。中村医師も一から土木の勉強をはじめたとき、多くのつまづきがあったことでしょう。ただ何かを待つのではなく、たとえ不器用であ

っても自分なりに頑張る姿が美しくもあり、無駄ではない軌跡が描けるのです。今から走りだす皆さんの学びを大学は応援してまいります。皆さんが数年後に卒業・修了を迎え、自分の軌跡を振り返ってみたとき、その軌跡はキラリと光るほうき星のように流れていっているはずです。そうなることを願い私の挨拶といたします。

2020年4月3日 北九州市立大学長 松尾太加志

(参考)

石弘之「感染症の世界史」角川ソフィア文庫(2018)

中村哲「天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い」NHK出版(2013)

神田莉緒香「走れハリネズミ」ストロボミュージック(2016)